



高木市之助全集

第一卷

講談社

高木市之助全集 第一卷

吉野の鮎・国見攷

昭和五十一年九月二十日 第一刷発行

著 者 高木市之助

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二二・郵便番号一―二
電話・東京(〇三)九四五―一二一(大代表)
振替・東京八一三九三〇

印刷所 株式会社精興社

製本所 牧製本印刷株式会社

©高木市之助 昭和五十一年
落丁本・乱丁本はお取りかえいたします

目次

I 吉野の鮎

はしがき	3
吉野の鮎	5
倭建命と浪漫精神	27
古代民謡史論	40
日本文学における叙事詩時代	76
民族文学としての記紀歌謡	101
感——記紀歌謡の古典的性格として	112
記紀から万葉へ	126

日本詩歌の母胎への一考察	142
古代歌謡における童謡の痕跡	155
齊明紀童謡の用字について	168
変え字法について	187
古事記歌謡における仮名の通用についての一試論	201
記紀歌謡の比較について	245
万葉集の表現美について	257
万葉集における清なるもの	288
海行かば	302
万葉集防人歌一首	312
象山際考	320
二つの生	328
跋に代えて	341

II 国見攷

国見攷	349
記紀時代人の生活——彼らの比喩をとおして	362
みやびの原精神	369
古文藝と創造的精神	373
山	395
古事記大宜都比賣の用字について	428
古点と古事記——春日政治著『西大寺本金光明最勝王経古点の 国語学的研究』について	445
万葉の魅力	451
万葉集卷第十六概説	457
防人歌と国家的精神	465
防人の妻の歌鑑賞	475

解題……………	解説……………
深萱和男……………	西郷信綱……………
488	479

I
吉
野
の
鮎

はしがき

本書は私の京城時代を記念するささやかな手帖である。私は昨年九州の大学へ転ずるまで足かけ十五年を京城の大学で暮らした。短い人間の一生にとって十五年は決して短くはない。事実それは三十代の壮者が五十代の老境に入ることであり、尋常一年の長女が婚約するまで成人することであった。こうしてはるばるとそれをふりかえってみると、私はいまさらのように京城に対して心からなる感謝を捧げたくなるのであるが、わけてもありがたいことは、その間、公私の雑事にわずらわされながら、ともかくにも読みかつ考える生活を恵まれていたということである。こうした恩恵の結果として私が学界に負うべき義務は、私が京城でこのように読みかつ考え得たことをこのさい一つの学問的な仕事にまとめて世に問うことであるかもしれない。がしかし、実のところ「京城の十五年」は私の生活においては必ずしもそうした一つの単位ではなく、それはそのまま今後の福岡の何年かへ連なっているものであって、もし私の健康と興味とが今後なお続いてゆくならば、私の仕事は仕事自体によって、他日自然に段落がつき、まとめられもすべきものという気がするのである。とはいえ私はまた一面、このように素気なくそっぽを向いてはいられない何ものかを感じる。この機会になんとかして、私のなつかしい京城生活特に読みかつ考えてきた生活を記念して京城への一応の報告とも感謝ともしておきたい。こう考えて思いついたのが本書の出版である。

所収の諸稿はこの十五年間に学会、講座、雑誌等のもともに応じて執筆したものの中から、主とし

て上代日本文学ことに万葉と記紀歌謡に関するものだけを拾い集めてみたのである。一、二福岡へ来てから執筆したものもあるが、これとても京城での読書と考察の所産であることは他の諸稿とまったく同一である。

諸稿はこうした、対象の範囲の共通ということを除けば、執筆のさいの事情や条件等のためにその態度体裁分量等においてまことに区々雑多であってなんらの組織も統一ももってはいない。各稿の配列にたいした考慮も払わず、書名も比較的新しい任意の一稿の題名をそのまま『吉野の鮎』と命じたゆえんである。しかしながら、もし多少の弁明がゆるされるならば、こうした無組織不統一にもかかわらず、これらの諸稿は私にとってはけっして学余の手ずさびでなく、それぞれ皆真剣な専門の仕事であったのである。少なくとも読者は本書によって私が過去十五年の間におよそどのような、記紀万葉の読み方、考え方をしていたかということ、こうした随筆的な無秩序の中にも看取していただけるかと思う。

昭和十五年の佳辰に

著者

吉野の鮎

美曳之弩能 曳之弩能阿喩 阿喩舉會播 施麻倍母曳岐 愛俱流之衛
み吉野の吉野の鮎 鮎こそは島べも吉きえ苦しあ

奈疑能母滕 制利能母滕 阿例播俱流之衛
水葱の下 芹の 吾は苦しあ

於彌能古能 野陸能比母騰俱 比騰陸多爾 伊麻拖滕柯彌波 美古能比母騰矩
臣の子の八重の紐解く 一重 だに 未だ解かねば 皇子の紐解く

吉野の鮎

これは日本書紀第二十七卷の終わり近く掲げられている童謡わらうた三首の中の二首である。紀にしたがえば天智天皇十年の十月十七日天皇御病重らせ給い東宮大海人皇子を召して後事を属し給うたが、皇子はこれを固辞し、天皇の御為に出家修道せんことを請いたまい、次いで天皇の御聴許を得て吉野に入り給うた。一方大津の宮では十二月三日天皇崩御、爾来いわゆる壬申の変が展開してゆくのであって、冒頭の二首はこうした崩御殯宮の記事の直後に「于時童謡曰」として遺されているのである。いったい記紀歌謡中童謡または童謡的な由来をもつ歌は他にも相当にあるが、この二首は特にそれらしい風格をもち、いわゆる時人の帰趣を伺うこともできて古代文学史上に重要な意義をもつ歌謡と考えられ

る。しかしながら私がこの小稿で考えたと思うことはそうした特に民謡的な性格についてではない。またこうした作品の奥に——たとえば信友がその「長等の山風」において試みたように——何らかの史実を掘り出そうというのでもない。ただ当時の文藝のかれこれの関連においてわが天武天皇の御像を彷彿し奉りたいばかりである。

ところで肝心の二首の意味については今日まだ定説があるわけではなく、守部もりべのいわゆる「いと耳遠くして定カには聞しりがた(1)」い状態にある。これらの諸説について一々紹介批判する代わりに、多少の卑見を諸説に参加させることが許されるならば、前者すなわち吉野の鮎の歌でまず感ぜられるものは、その表現意図において鮎と我との対照によって何ものかを言い表そうとしていることである。われわれは類似の発想法を同じ記紀の歌謡の中に幾つも求めることができる。たとえば、

汝こそ男にいませば云々つま 婦もたせらめ吾はもよ女にしあれば云々め (神代記—須勢理毘売命)

衣こそ二重もよきさ夜床をならべむ君は長きろかも (仁徳紀—磐之媛命)

天にこそきこえずあらめ国には聞えてな (雄略紀—尾代)

つまり二物を対照し、前者にこそ、後者にはを添えることによって、前者を引きあいに出しつつ主目的たる後者を強調しようとする手法である。前例で具体的に言えば、「私は弱い女なのですから貴方のほかに男はないのです」という主目的をいっそう強く表すために、「貴方こそ男でいらっしゃるからほうぼうに妻をお持ちでしょう」とうたうのであるが、吉野の鮎の童謡もまたこの同じ手法によ

っているのである。すなわち「こそ」と「は」にすがって対照の目標を探してゆけば、「我はくるし
ゑ」という主目的を強めるために吉野の鮎こそは、と引き合いに出したにちがひなく、なぜ「我」が苦
しいかといえ、それは「水葱^{なず}の下^{さぎ}」のためでなければならず、これに対立してなぜ鮎の場合
は苦しくないかといえ、それは「島辺も吉き」という語の意味にかかわらなければならぬ。こう考
えてくれば「島辺も吉き」と「水葱の下^{さぎ}の下」とは離れ離れになつてはいるが、その実同一のこと
を二カ所にわけて表現していることがほぼ想像でき、語句を適宜還元して大意を要約するならば、「吉
野川の鮎こそは島辺⁽²⁾の芹や水葱の蔭に棲んでいるのもけっこうだろうが、人間の私はこんな山奥の吉
野川のほとりに蟄居^{しやく}しては苦しくてたまらない」という意味になるであろう。してみればこの一
首に諷諭されているものは大海人皇子が天智天皇の御本心を察して、吉野に遁れ入り給うた御心境に
対する、時人の同情にほかならぬのである。なおここで興味のあることはこの童謡の作者が大海人皇
子を叙し奉るにさいし吉野の鮎を拉^ちし来ったことである。歌の中のわれが大海人皇子であることを表
すために、その遁れ住みたまう吉野にゆかりを求めた作意には、いかにも民謡らしい神興が感ぜられ
るが（したがってこのわれを大友皇子と解する諸説はこうした作意を見落としたいみじき誤解であ
る）、さらにわれわれはこの鮎が作者たちいゆる時人の大海人皇子に対し奉る親愛の心情をよそな
がら表現しようとする隠微な比喻関係を看過してはならない。およそ上代歌謡において比喻は比喻す
るものと比喻されるものとの二つの世界を結ぶ唯一の（といつてもよいほどに重要な）象徴関係をも
っている。少なくともそれは後世の創作和歌などに往々にして見受けるような空虚な修辭的技巧では
なく、そこに切実な彼らの生のなんらかの表現があることはこの頃の歌謡に親しんでいる人々にはあ

まりにも明白な事実である。吉野の鮎はこの童謡におけるこうした比喩の実証であって、すなわち吉野の鮎に対する作者の愛着（それは「隼人の端門の磐も鮎走る芳野の滝になほ及かずけり」（万葉集、九六〇）などと詠まれた万葉人の感情からさかのぼって類推もされることであろう）はそのまま大海人皇子に対する好感同情の象徴的表現にはかならないのである。そうして本歌が、書紀にしたがって、「時童謡」であって個人的な創作歌謡でない以上、皇子に対し奉るこうした親愛の情もまた個人的な感情ではなく、むしろ時人に共通の好感、たとえば民意とかあるいは御人氣（畏れ多い用語かもしれないが）とかいうに近いものであったに相違ない。書紀卷二十八に左大臣蘇賀赤兄臣らが皇子を菟道に送りまつて大津に帰る条に「或曰虎著翼放之」とあるのを信友が時人の語と解したのを、『通釈』の著者が「此評は時人の語にはあるべからず。近江朝廷にして天皇を除き奉らむとの密謀に預りしものの語なり云々。されば此語時人の頃に天皇を惡さまに申したる辭にあらず。我が隠謀のたがひたるを口惜しむが余りにかゝる語をも発したりしなりけり」（『通釈』第五、三五〇六頁）となじっているのは少なくともこの童謡の関する限り正しい見解となさざるをえないのである。

つぎの「臣の子の」の童謡もまた「さだかに聞きしり難」いことは吉野の鮎と同様であるが、ただ一つの手がかりは、ここにも求められる或る対立であろう。もっともそれは吉野の鮎の場合と異なり、漠然ながらも作者すなわち時人の或る愛憎ないし向背に連なるらしい対立である。この歌の比喩は「八重の紐」を「解く」ことで、それがどのような事実をたとえているかによって諸説がわかれるのであるが、この点しばらくおき、そうした八重の紐を解く者が「臣の子」と「皇子」と対立していることにまちがいはない。（したがってこの対立を見落とした諸説はこの童謡の主たる意図を逸したと

いう意味においてすでにその出発を誤った見解といふべきであらう。)そこで対立の内容をしらべてみるに、「臣の子」は一重だに解かないあるいは解きえないのに対して、「皇子」は八重の紐を八重ながら解き給うのである。こうした対立関係は「だに」の雄弁な表現によって明瞭にわかるのであって、もしこうした表現に乗ってゆくならば、「臣の子」に属するものは無能であり軽蔑であり不信であり、反対に「皇子」の属性は万能であり尊敬であり信頼であると言えはしないか。——少なくともこの童謡の表そうとしてゐる主意はこうした鮮やかな対立であつてそれ以外の何ものでもない。そこで書紀の上述「于時童謡曰」の句にもどり、この「時」における相対立するものが何かと求めるならば、それは必然に壬申の変における相対立するものでなければならなくなるであらう。ここにおいて「臣の子」とは近江の御方の臣の子、すなわち故松岡静雄氏の見解のように主として蘇賀赤兄臣を指すかあるいは山田孝雄氏のように「大臣有力者」たちを指すか⁽⁴⁾でなければならず、一方「皇子」とは「吉野の鮎」の「われ」すなわち大海人皇子を指し奉ることとなるのである。こういうふうを考えてゆくと、二首の童謡はその内容においてはいかにも童謡らしく漠然たるものであるにもかかわらず、時人の大海人皇子すなわち天武天皇に対し奉る親愛と信頼の姿だけは不思議に鮮明であり、こうした角度から窺えば前者には時人の寵児として当時の人気を負わせ給うた皇子の大きな苦しみがのたうち、後者には反対に皇子のこうした苦悩を克服して邁進し給う洋々たる将来が保障されているのを感じよう。この意味においてわれわれはここにわが天武天皇の御像を描き奉った二枚の簡素な素描(といつてもかなりよくできた)をもつとは言えないであらうか。

ところが天皇には、みごとにこれと照応する、別の二枚の、同じく素描らしい御自画像があるのである。

天皇御製歌

三吉野之耳我嶺爾時無曾雪者落家留間無曾
みよしののみがのみねにときなくぞゆきはふりけるひまなくぞ
雨者零計類其雪乃時無如其雨乃間無如
あめはふりけるそのゆきのときなきがごとそのあめのひまなきがごと
隈毛不落念乍敍來其山道乎
くまもおちずもひつゝぞこしそのやまみちを
(万葉集卷一―二五)

或本歌

(省略)

天皇幸于吉野宮時御製歌

(天武)

淑人乃良跡吉見而好常言師芳野吉見與良人四來三
よきひとのよしとよくみてよしといひしよしのよくみよよきひとよくみつ
(万葉集卷一―二七)

紀曰八年己卯五月庚辰朔甲申幸于吉野宮

二首はその内容から推してともに吉野に関する御製と察せられるが、前者はいかにも沈痛憂鬱であるに對して後者はまことに解放的に明朗である。この点吉野の鮎の童謡のあえぐような態度と臣の子